

75

清国兵俘虜の体格検査に関する一考察 (1)

誌上発表

秋田 博孝

広島市

日清戦争で生じた俘虜に対して日本は国際法の慣例により取り扱いを行った。俘虜には内地収容と戦地滞留との二種があり、内地収容に係る者は明治27年8月16日より28年6月9日まで戦地より宇品に航送して留守第5師団司令部に交付した。更に同司令部より受領の都度、指定の収容地である東京、佐倉、高崎、豊橋、名古屋、大津、大阪、広島、松山の9ヶ所に分配した。このように国内9ヶ所に清国兵俘虜が収容されていたが、俘虜に対して当時の野戦衛生長官石黒忠恵及び帝国大学医科大学解剖学教授小金井良精が夫々体格検査を行っている。今回は石黒の体格検査の目的や経緯について報告する。

石黒の『懐旧九十年』によると徴兵令制定の際、石黒は徴兵には壮丁の体格が肝心であると山県有朋陸軍卿に具申し、山県より身材の事を調べるよう命を受けた。石黒は水戸、長州、薩摩の兵士の体格を調べたが、これらは殆ど士族であるため士農商一列の全国の壮丁に当てはめることができないため、市中の村や銭湯で若者の身体を測ったりした。このような苦心の結果、最初の徴兵基準は、身長5尺1寸ということになったが、実際に徴兵検査をはじめるとこの基準ではやや高すぎることがわかり、まもなく5尺に改められた。徴兵検査の要は身体強健、精神完全で定年間の役に堪え得る者と種々の疾病、奇形があり堪えられない者とを区別することにあり、徴兵医官によって詳細な身体検査が行われていた。

明治27年12月に石黒は『日清両国兵体格の比較』という一文を草している。それによると当時、清国兵の体格や力量が日本兵より大いに優るといった風説があったが、石黒は統計的根拠がないとの理由でこの臆説を斥けており、反駁するために俘虜所在地の師団軍医部長に軍陣衛生的調査を命じた。その内の当時留守第3師団軍医部長の谷口謙の体格検査成績表が最も精確との理由で採用され名古屋の俘虜が比較対象となった。

明治27年9月15日の平壤の役における清国兵の俘虜539名は10月14日宇品に着き、広島から山陽鉄道に乗せて運送されて、その内の100名が17日に名古屋に到着した。俘虜に負傷者は無く、2、3名の下痢患者がいたが廠舎である名古屋市の建中寺に収容された。しかし俘虜の不潔は言語に絶し、頭髪は悉く虱群の棲となり、一種の臭気は綿々と鼻を衝くといった有様で衛生状態は劣悪であった。また俘虜は名古屋到着以来下痢に罹るものが多く、赤痢病、急性胃腸加答児などで続々と陸軍予備病院に入院する者が出たが、12月下旬になると入院者は3、4名に減じていた。従って11月頃に傷病のない俘虜が体格検査の対象になったと推測される。

調査対象となった日本兵は入営後満1ヶ年を経過して検査した者14,218名、清国兵は身体健全の各種兵77名で年齢は16歳から55歳までで、在営年限は3ヶ月から2ヶ年で平均1年8ヶ月であった。調査結果(日本兵:清国兵)は、年齢(21歳5ヶ月:29歳10ヶ月)、身幹(5尺4寸4分:5尺5寸)、体重(16貫240匁:14貫600匁)、胸囲(2尺8寸1分:2尺9寸6分)、呼吸縮張の差(2寸3分2厘:2寸2分1厘)、肺気容量(3631立方仙米:3129立方仙米)、握力(41基瓦米:31基瓦米)であり、身幹、胸囲以外は日本兵が優っていた。

当時の一般的日本人の体格は貧弱であったが、一方清国人は西洋人と互角以上の者もあり、清国兵の中には日本兵には見られないような偉大な壮兵を間々見ることがあった。しかし石黒は少数の統計のため断案するのは早計であると断りながらもこの結果のように日本兵は清国兵に比べて殆ど遜色がなくむしろ清国兵を凌駕する点があるのは、清国では撰兵の際に学理的な身体検査法を用いていないため、この結果より日本兵が強壯であるのは衛生学が与って力あるという一斑を知ることができる。論じている。